

短編 ISクロスオーバー

鬼の半妖

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

唐突に思い付いた短編クロスオーバー集。あまり期待はしないように。

目次

仮面ライダー	
Skull succeed	1
仮面ライダービルド要素をぶっ込んでみた	6
七つの大罪	
傲慢な2人目	8
白夜叉の誓い	
IS×銀魂	11
今日は毛根を死滅させる日	15
IS×新光神話パルテナの鏡	
それを出すんじゃない！	22

仮面ライダー

S k u l l s u c c e e d

とある男が居た。彼には師と呼べる人が居た。
けれど、彼の師は“私”たちを庇った際に凶弾に撃たれて死んだ。
でも彼の師は、彼に真っ白な帽子を被せて彼に言った。

「やっぱお前は……帽子が……似合う………」

それが彼の師の最後であった。
彼は泣いていた。泣いていたが、耐えていた。
彼は半ズボンのポケットから“何か”を取り出し、腰に着けた。
自動的にベルトが装着されると、その男は1つの“USBメモリ”
を……『ガイアメモリ』を取り出し、起動させた。

【S k u l l】

「ハア……ハア………ツ！変身ツ！」

赤いメモリスロットに入れて、倒す。

【S k u l l】

彼は、風を纏いながら姿を変えた。
白く薄汚れたマフラー、人間の骨格をモチーフとした姿。額には稲
妻が走る様にSという文字。

彼は戦った。教えられた技術と力を用いて、ISの連中を次々と倒
していった。

でも、何処か彼の表情は寂しそうに見えた。隠されているにも関わ
らず。

彼は隙を見て、私を連れて逃走を凶つた。
バイクを乗って逃走をしても、やはり悲しそうな表情であつた。

「……………カ。……………ドカ」

「うう〜ん……………ふくう〜」

「…………………………マドカ！」

「ひゃい！」

耳元で大声で呼ばれ、咄嗟に起き上がった私。声のした方を向くと、大声を出した本人が居た。

白一色のスーツに紺色のネクタイ。そして彼のトレードマークの白い帽子。

「何時まで寝てる。そろそろ依頼人が来るんだ、片付けろよ」
「……………はふう。はい」

何故かテーブルの上で突っ伏して寝ていたらしく、そのテーブルを見ると幾つかのメモリとツール。カメラと携帯を着ているパーカー

の前ポケットに入れ、メモリもその中に。

てつと走って高めの椅子によじ登り、座る。そしてツールとメモリを机に出していく。彼は「何時もの様に」コーヒー豆を炒っている。

「あの〜……………失礼します」

ドアに取り付けている鈴がカランカランと心地よい音を響かせながら来客の知らせを告げる。

その依頼人は女性。今は女尊男卑という世の中にあり女性が男性を見下すことは「普通」ともいえる。

だが彼は何時もの「はーどぼいんど」とやらを忘れず、丁寧に迎える。

その女性は扉近くにあったソファに座り、彼はコーヒー豆の具合を見て調度良い頃合いになったのか粉碎機に入れて豆を挽く。因みに出すのは中挽きの状態。

それが終わると今度はドリップ。「さいふおん」なる機器で慣れた手付きでコーヒーを作る。出来立ての匂いが鼻に来るが、何故か心が落ち着く。

そのコーヒーはカップに淹れて依頼人に出す。彼曰く「コーヒーに時間をかけるのは、依頼人の心を整理させる為」だそうだ。これも彼の師からの教え。

私は机に置いているツールの確認。といつても携帯で「縁あつて」知り合った人にメールのやり取りをしていく。ただ横から依頼内容が聞こえてくるため、癖で頭の中で整理してしまう。

依頼者の名前は『市原 海理』。年齢は24。依頼内容は最近の妹の行動がおかしいので調査をしてほしいというものだ。ぎつくりと纏めれば。

妹の名前は『市原 美崎』というが、容姿の方は写真にでも写しているのか言われなかった。そして何時も夜に何処か出掛けるのだそ

う。

彼はその依頼を了承し、1週間後にまた来る様に伝えた。彼女は事務所から出ていき、彼は写真を私に見せてきた。

何というか……肌が黒い。彼が言うには「がんぐろ」なる死語が似合う位の黒さと評価している。身なりや風貌から察するに遊びまくっているのは確かだろう。

「さて……マドカ、行くぞ」

「はいー」

余談ではあるが、私は彼の助手だ。彼曰く「この御時世に居て良かったと思っている」らしい。助けられたのだから、恩返しは当然する。当たり前なのではないか？

彼はその服装の状態で、私もその服装の状態で外に出る。彼の愛用する「すかるぼいるだー」に乗り、私たちは体で風を受ける感覚を味わいつつ「遊び場」なる場所に該当する店を捜していく。

私は人造人間である。何を言っているか分からないと思うが、私は人造人間である。

私はある人間のDNAを基礎に作られた模造品で「あった」。さらにはガイアメモリとの適合できる様に無理矢理体を改造された。

だが今は違った。彼の師と彼によって助けられ、そして彼によって

「私は私で居られる」様になった。私も、彼の手伝いが出る様になっ
た。

私の名は『鳴海^{なるみ} マドカ』。彼が付けてくれた、私が私である名前。

その名付け親である彼の名は『佐川^{さかわ} 翔吉^{しょうきち}』。

都市伝説なる「仮面ライダー」である。

仮面ライダービルド要素をぶつ込んでみた

試合開始のブザーはとうの昔に鳴った。だがセシリア・オルコットは目の前の織斑一夏以外の男の存在を危険視していた。確かに男がISに乗るという類稀な運命を持つこの男は、オルコット家とは深い関わりがある上にデュノア社の子息……それを無視しても、その男の乗る第三世代機の性能に恐れをなしている。

「……そんな警戒されてもなあ」

「Mr. デュノア、貴方ほどの腕の持ち主に対して警戒するのは至極当然ではなくて？」

「んー……ま、そつか。でも戦況が動かないんじや……観客がつまらないでしょ？」

赤と青の2つの色が別れた形でペイントされているデュノアのIS。それだけでも異様な雰囲気があるというのに、さらに異様な点を挙げるとすればISの両腕に取り付けられた一対の差込み口にある赤と青のボトルだ。

デュノアは徐に量子格納域から真紅のボトルと鋼色のボトルを取り出すと、両手で2つのボトルを振り始めた。シャカシャカと心地好いリズムを刻んでいくボトルから、16進数で構成されたデータ式がデュノアの視界だけを埋めた。

「さあ、実験を始めようか」

ボトルキャップをそれぞれ片手で動かすと、腕の差込み口にあったボトルは自動で消えて、空いたスペースに新しく2つのボトルを差し込んでいく。

〈フェニックス！〉〈ガトリング！〉

差し込まれると、デュノアのISのアーム部分が一部展開し内側に余白が出来る。その余白の中に出て来た2つのハンドルを回していくと、これまた別の心地好いリズムを奏でる。

デュノアはある程度回したところでハンドルから手を離し、ISのアーム部分を元に戻した。その時、ちょうど良いタイミングで音声デュノアのISから鳴り始めた。

〈Are you Ready?〉

「ビルドアップ」

そう唱えると、赤と青の装甲は入れ替わり、真紅と鋼の装甲へと変貌した。そしてデュノアのISの右側に不死鳥の尾を摸したものが垂れ下がり、左手には小型ガトリングの様な物を装備していた。

デュノアはISの頭部にある2本角の内の右側を右手でなぞり、その角を通過するとパツと手を開かせる一連の動作で、決め台詞を吐く。

「L a l o i d e l a v i c t o i r e a . t . d .
c i d . e 勝利の法則は決まった、つてね！」

空へと飛び上がったデュノアとセシリア。セシリアの機体『ブルー・ティアーズ』の装備する【スターライトmkⅢ】と、デュノアの機体『アーカイブ・ビルド』の装備する【ホークガトリンガー】のエネルギー弾が飛び交う。

果たしてどちらが勝利するのだろうか。

続きは読者が望めば多分書く！

七つの大罪 傲慢な2人目

この女尊男卑変わりに果てたの世界で、最強とはなんであろうか？

女？女はISが無ければでんで駄目だ。つまりISを自分の力だと妄言を吐いている様なものなのだ。

では男か？違う。一部は異常な行動を取る者達が居る様だが、この世界の大半の男は女を起こらせる事が恐ろしいと感じている。

ではISか？違う。あんな玩具ガラクダというのは壊れるのだ。高々やれミサイル兵器を潰せるだの、やれ国1つ潰せるなど抜かしているが結局はそこまでなのだ。

では最強とは誰だ？この世界ならば世界最強と答えるだろうが、それは人間だ。結局人間の範疇を出ない。神だと崇拜しようが、結局は弱い人間である。

この世で世界最強……それはこの太陽系にたった1つしか存在しない唯一無二の絶対的存在。そして、それに相応しい能力者。

彼を知る者は口を揃えてこう発言するのだ。“あれ”は本当に人間なのか？そう疑うほどの強さを持っているのだ。

その彼の名は『陽向ひなた 陽一よういち』。この世界で最強の人間であり、訳ありの料理長である。

「つていう感じで小説の前書きを埋めようと思うんだけど、どう？」
「何をおっしゃられてるんですか？」

とある某所。ここに2人の人間が向かい合って座っている。ノートPCで小説を書こうとしている男の前には既に食された後なのだろう空の皿が。

「というか、僕の本名出さないで下さいよ。しかも殆ど僕のことを題材にしないでください」

「だって秘密事抱えるの面倒じゃん？何時かバレるんだしさ」

「アンタそれ皇太子殿下の台詞ですか？」

「秘密を口外して良い特権得てるんだから有効活用しないとき。あと皇太子殿下に向かってタメ口っていうのも同かと思うよ？」

「幼馴染みに遠慮は無用って言ってたの皇太子殿下御本人なんだけだな？あと権利乱用はしないで」

多少キレ気味で答える料理長。1つ言えることは、陽向陽一は皇族専属の料理長とだけしか言えない。まあ既にベラベラと長つたらしく書かれていたのだが。

「えー、これしか題材思いつかないんだけど？」

「……そういえば今は11時59分ですね、今から眼鏡を外して「マジですいませんっした！」……………ハア」

何故か時間と眼鏡を外すということだけを伝えると日本人のへりくだった謝罪法【DO☆GE☆ZA】を僅かコンマ5で素早く行った皇太子殿下。陽一は空いている皿を片付ける準備をしていく。

「あっそっだ」

唐突に頭を上げた皇太子殿下は何か思い出した様であった。

「陽一、お前ビツクニュース知ってるか？」

「昨日父が牛鬼連れて帰って来たことがビツクニュースですが？」

「いや叔父さん何してんのよ？じゃなくてさ、男子で初めてIS操縦者が出たニュース」

「……………そんなこともあつた様な？」

「相変わらず疎いねえ。流行りに乗り遅れてるわあ」

「そりゃアンタと違って毎朝毎昼毎晩料理作ってるの僕ですからね。仕込みとか大変なんですよ」

「何時もすんません」

「んで話変わるんだけどさ、これで男もISの適性があるのか一斉に調べるんだとさ……………まあお前には無用の長物だと思うけどさ」

「分かってるなら僕はしませんよ。面倒じゃないですか」

「残念皇族関係者も全員強制参加」

「F○c k」

そしてこのあと、その陽向陽一にもISの適性があることが発覚し、学園に入学させられるのは別の話。因みに今年で20歳であった。

白夜叉の誓い IS×銀魂

俺は「忌み子」である。それは今も昔も変わりはない。

まるでおとぎ話の様で、そうじゃない【現実】。

実際あることなのだ。こんな幻想話。

だからこそ敢えて言おう。

——俺は「夜叉の呪い」を受けた忌み子である。

……少し昔の話をしようか。俺はとある村で産まれた1人の男だ。何の変哲もない男だ。

「男である」が故に生け贄にされた。

その村には古くからの言い伝えとして、凶作や災害が起きた場合「古い神社に赤子を捧げる」という馬鹿げた風習があったのだ。

……もうお分かりだろう。俺は、その凶作の頃から数ヶ月前に産まれた。しかも村にまで女尊男卑が浸透しているせいで本来なら小さな女の子の筈であつたが、俺が選ばれてしまった。

親の顔は……まあ知りたくない。というより知りたくもない。産みの親の癖にぬけぬけとってヤツだ。

そして俺はどうやら生け贄にされた。そう思っていた。

だが不思議なことに、俺は生きてる。たった1つの異常を抱えながらも普通に生きてる。

しかも幼い記憶の中に暖かい記憶があるのだ。暖かくて優しい記憶が。辛うじて覚えてるのが4歳の頃だろうか。

だが今は『更識』の家でお世話になっている。何でも先代様の知り合い陰陽師が俺を連れてきたそうだ。連れてきたのは良かったが金が無いので先代様の所で厄介となった。

今でこそ流暢に日本語を喋るが、昔は俺も上手く喋れてなかった。

だが幸いにも子どももの好奇心旺盛さによつて言葉や用語などを覚えていった。何か分からない時は御手伝いさんに教えてもらったり、恐縮ながら先代様にも教えてもらった。

そして6歳の頃、俺は先代様に鍛練を積みさせてもらうことになった。きつかけは俺だ。恩返しがしたいという名目でだ。

勿論初めの頃は基礎ばかりだ。だが俺にとつては新鮮で何時までも続けられても良い気分だった。

更識刀奈と鍛練を積んだ。先代様の娘さんは2人、そしてその娘2人には専属メイドが居る。メイドという単語を聞いた当初は何の事やら全くもって理解できなかったのは良い思い出。

鍛練に違いが出てきたのは、俺が始めて半年経ったある日だった。以前にも増して剣、体術、暗具の使い方が上手くなってきたのだ。鋭さ、思いきりの良さ、素早さ、力強さ。これは男であるが故に女よりも力が強いから……なんて言われたが今では違うと分かっている。夜叉の呪いによる影響でもあった。俺の背中には黒い模様がビツシリと描かれており、その頃は結構なコンプレックスでもあった。今でもそうだが。

兎も角、俺は夜叉の呪いの効力を微弱ながら受けつつ修行していた為にその時の指南役の先代様と同等の力を僅か9ヶ月で身に付けた。その時の驚き様は今でも忘れない。

でも良いことばかりでは無いのは確か。刀奈から睨まれるのなんの、喧嘩ふっかけられるのなんの。……流石に狼狽えていた先代様を見るのは辛かった。

かなりの負けず嫌いというか、何というか。そもそも土台が違うのに何度も何度も向かって来て。負ける度に技術を身に付けて……俺年下だぞオイ。

しかも先代様から『楯無』の名を受け継がんか？何て言われる始末。まあ断つたが。そもそも俺は更識の厄介になつてる身なのに当主になれと言われてもな。

まあこの夜叉の呪いがある限り、俺が甘えるのは無しにしたい。そして俺が居るのは恩返しのためでもある。

だから敢えて言ったさ。俺は更識の汚れ役となりたい”って。その時の先代様の恐ろしさは呆氣に取られた。呆氣に取られてる辺り、俺も呪いの浸食を受けているのだなと感じつつある。

何故？と尋ねられたから答えた。俺は本来どうなっていたのか分からない化け物であるからこそ、俺は更識に恩返しをしたいと。更識が汚れない様に俺が汚れ役となると。

渋々だった。先代様は俺の変わらない意思というのを渋々ながら汲み取ってくれた。いや、俺がめげずに土下座の状態で懇願し続けて、だな。

そうして俺は更識の汚れを一心に請け負うことになった。『楯無』と呼ばれた先代様に忠誠を誓った。何人も殺したさ。夜叉と呼ばれる鬼の呪いを受けた人間は、本来居るべき筈の場所ではないからこそ俺は戦地に身を投げることも出来た。

ファンタム・タスク
亡国企業の名を聞き付ければ、人体実験の詳細を聞かされれば、俺は何処だろうと駆けることができた。その度に先代様は怪訝そうな顔をされていたが、これは俺の選んだ道だ。

IS相手も幾度とやった。だが結果は俺が破壊して圧勝。コアは残したままだが、実質コアだけまでに壊した。

「(ま、今はそこまで。か)」

ここ最近では実際汚れ役となる仕事は無い。良いことなのだが、俺にとっては暇。今は俺の実力を買われて部隊訓練をしている。名前？俺の隊の馬鹿が付けた「鬼兵隊」っていう、どうしようもない厨二丸出しの名前さ。

だが意外にも慣れるものだな。”鬼の兵が集う隊”だもんな。俺実際に鬼だし。

先代様は刀奈と当主変わったし、簪や本音に虚ともアホ言い合って楽しくやれてる。刀奈と簪が喧嘩した時は面倒だったが仲介人になってやったぜ。そこで刀奈に宇治金時井を奢らせたがな！

……とまあ昔語りはここまで。今、俺は……………

「何で銀ちゃんが動かしてるのよ？・IS」

「俺が聞きてえわ、んなもん」

ISを動かしてました。

俺の名は『坂倉 銀先』。恐らく夜叉の呪いであろう影響で銀髪になっちまった。そのせいで裏業界ではこう呼ばれている。

———【白夜叉】と

今日は毛根を死滅させる日

——更識家にて

「はい！銀ちゃんがISを動かしましたー！拍手く！」

……何故か刀奈がハイテンションの中、簪と虚と本音は苦笑い。何故かつて？

「痛い痛い痛い！毛根に負荷をかけんじゃねえ！馬刀奈！」

俺の毛根がヤバイんだよ！いい加減にしろ！

「おおん？現更識当主に何て口の聞き方してんのよ腐れ天パ」

「喧しいわ馬鹿！大体従者に暴力振るのは御法度だろおが！そんならい知らねえのか!？」

「知ってるわよそんなもの」

「じゃあすんな！俺の毛根死ぬんだよ！妖怪の力あるけど死滅した毛根はどうにもなんねえんだよ！」

「その口を閉じやがれ銀メツキ」

「挙げ句の果てには暴言！まあこんなのが楯無と呼んでも良い！目潰し！」アアアア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”！」

髪掴まれて引っ張られた挙げ句、目潰ししてきやがった！お前人間じゃねえ！悪魔だあ（○□リー節）。

「御二人共、痴話喧嘩はそれほどにして下さい」

「痴話喧嘩じゃねえ！」

「説得力が皆無」

「仲良いねく、楯無お嬢様と銀ちゃん」

これの何処をどう見たら仲良しに見えるんだよ本音！つかさつきから頭がヒリヒリしてきたんだけど!?やめろ！俺の毛根はボドボドだッ！

「でえい！HANNA☆SE！HANNA☆SE！」

「このまま毛根ごと引きちぎってくれるわあ！」

「アンタらしい加減にお黙りやがれ下さい」

「サーセンっしたあ!!」

虚さんが本気で怒っていらっしやられる……！やべえんだよ、虚さんガチで怒ったのプリン食われた時ぐらいしか見たことねえよ。因みにその時の犯人は俺だったりして。

「本音、あれ」

「はいはい」

本音さん？何を渡してるんですか？そして虚さん、何故に真剣持ってるんですか？えっ、ちよ待って。俺の方に来ないで嫌な予感しかないから。

ねえ待って！謝るから！プリン食ったことも大福食ったこともドーナツ食ったことも楽しみにしていたジエラート食ったことも謝るからさ！……って全部食い物じゃねえか。

「銀さん知ってますか？」

「な、何をでしょうか……虚はあん」

「食べ物の恨みは恐ろしいって」

やめて！真剣を上げないで！いやガチで！それ滅茶苦茶痛いんだよ！頼むよ虚さあん！えっ、無理？困ったなあ。

「天誅！」

「ぎにああああああああああ！」

今日のギニア 【脳天に完全に入らなかった真剣が刺さった銀先】

「あー……おもつくそ痛え。ちよつと凹んじまったじゃねえかよ」

「真剣でやったのに頭凹むだけですか貴方は」

「ねえそんな発言辞めてくれない!? さっきの殺意丸出しだった気がするんだけど!」

「殺すつもりでした」

わあーお。汚れ役が殺されるってこれ如何に? 洒落にならねえよツ!

「まあ銀ちゃんの自業自得だよね」

「まあ……あれはね」

「宇治金時井の金返せえええ!」

「奢る約束だったろおがあ!」

やめろ来るな! 飛び付くな! 金返せって呟きながら来んな! T W
i i o e r で呟きながら来るな! んお? L I N O ……って金返せ打
つな! 連続で送るな! 通知がうつせえんだよお!

『進まないから飛ばします』

さて、今ここに集まったのは俺が I S を動かしたという大問題ならぬ
ぬ大キ問題の為に集まった……って誰がキモいつつたあ! あ、俺だ
……

えっ? 何で問題なのかってか? 本来 I S は女にしか扱えない代物
なんだよ。だから俺が装着できたこと自体がイレギュラー過ぎるん
だよ。

「例えるなら漸く彼女に告白できると思ったら元カノが乱入して修羅
場になるくらいイレギュラーなんだよ」

「例えが分からないよ銀さん」

「ライダーと敵がバトルしてたら突如第三勢力が現れてライダーと敵が共闘するくらいイレギュラーなんだよ」

「理解した」

やはり簪には特撮で例えさせるのが手っ取り早い。まあんなことよりも……

「なあ刀奈、俺どうなんの？」

「女の園の園にハーレムワンチャンダイブという選択肢しかない」

「いやだよお！」

はっ！ちよつと待てよ？俺には仕事もありーの汚れ役でありーの
実質世間に居ると不味い存在だよな!? だったら世間に出るのは不味
いんじゃないか!?

つまり俺はタヒぬことを回避できる！QED証明完了！

「更識、情報操作、大魔王からは」

「逃れられなかったッ………!!」

「ハッハア！腐れ天パよ、3ヶ月後が楽しみだあ！」

「そもそも、何で銀ちゃんが動かせたの？」

「「それなんだよ」「」」

これだよお。ハモつちやつたけどこれなんだよお。何で俺が動かせたのお？いやマジで。

「あれですか？ “あれ”のせいなんですか？」

「思い付く限り、それぐらいしか」

「無いわよねえ〜……」

「何？何なの？これが両性具有の呪いも追加されてんの？じゃあ俺フタナリなの？」

「せめて平仮名にしなさいよ。片仮名だと何か汚いし」

「あれか？平仮名で『う〇こ』書いてもそこまで思わなくて片仮名で

『ウ〇コ』って書くと汚さが増すあれか？」

「そうよ。せめてフタナリじゃなくて “ふたなり” としなさい」

「どっちにしろ変わらないけど」

「「だよねえ」「」」

「いや誰かツツコんでくれよ！完全にボケ役しか居ねえじゃねえか！
いい加減にしろー！」

「いや私たちツツコミ役というよりボケ役に適してるとしか言えない」

「やめて！メタくなりうる現実はやめて！」

「ボケとツツコミのフタナリ、それが銀ちゃん」

「否定できねえよお……本音さあん」

その時！不思議な事が（ry！えっ？何で割愛したかって？皆これ知ってるから良いじゃん。

いやさ、何か庭にぶつ刺さってるデカ人参があつたんだよ。ぶつ刺さった時の轟音が響いた訳よ。勿論行ったよ？俺何時もの木刀持ってた。

少ししたらさあ……扉みたいの一部の壁が開いて誰か出てきたわけよ。そしたらさあ、世間を騒がせた天災が居たわけよ。

ただね、この時俺そいつを見た時に直感で思ったのよ。こいつ面倒だなって。だから出てきて会いまみえた時、ちよつとやらかしちまつたのよ。

こいつの髪の毛根ごと数百本抜いちゃった。

IS×新光神話。パルテナの鏡

それを出すんじゃない！

IS学園。この女尊男卑の時代の中、ISによるISの為の専門学校として設立。今や殆ど女の園と言っても過言ではない。

しかしこんな世の中に、況してやこんな学園の中に異質な者が2名。

世界初の男性操縦者として名を馳せた『織斑一夏』。そして2番目に見つかった『パール・ヴェート』の2名。不思議なことにパール・ヴェートの出生は誰も知らないし、知り得る術が無い。以前に更識楯無と呼ばれる女子生徒に尋ねられたが、ヴェートは「曾祖父がはっちゃけて作っちゃったんだよねえwwほんとアグレッシブだったらありやしないよ」

という風にはぐらかしている。いやぶっちゃけ曾祖父何歳なんだ？というのは楯無の頭に思い浮かんだがそれは置いておこう。

そして現在、あの時から1週間が経過していた。

そして2名の男性操縦者はピット内に居る。理由は簡単、1週間前にクラス代表を決めることがあったがクラス内では物珍しさに男子2名を推薦していたのだ。

勿論、学園内には女尊男卑の生徒も居る。主に織斑一夏とその女尊男卑であるイギリス出身の生徒『セシリア・オルコット』との論争に発展、あたふたしながらもヴェートが止めようとするも2人から罵られた。

これでは一向に話が進まない為、実力行使の策。つまるところISで決着を付けようじゃないかという昔の考え方。日本じゃ決闘罪で逮捕されるので辞めようね。

そう、こんなことが何やかんやとありまして……今の状況だという訳です。

しかし織斑一夏のISがまだ到着していないので、先にヴェートからすることとなった。しかしISを纏わずに向かつて行く為、声を掛

けて歩みは止めたが直ぐにアリーナへと向かっていった。

目の前に居る女尊男卑のセシリア・オルコットをつまらなさそうに見ているヴェート。相手は降参しに来たと勘違いして高笑いしていたが、ヴェートはそれよりも大きな声で笑い飛ばし観客の注目を集めた。

ヴェートが右手を天に掲げると交差させられたリングが宙に浮かびその姿を現した。

一言で言うなれば「ゴツい」。全身装甲に加え右手には銃剣、左手には盾とオーソドックスだが一番注目すべきは背中の紋様。

この世の物とは思えないほどの神々しさに加え、相対してはならない絶対と言える存在。正しく神が作りし逸品。

ヴェートは「それ」に乗り込むと動作確認をする。何も問題はなさそうなことを確認すると、ヴェートは遠距離攻撃を1発だけ放つ。咄嗟に避けたセシリアだったが、急速に懐まで近付かれて銃剣で切りつけられる。

「さあて！デイントス曾祖父ちゃんのTST-NEOの性能、期待するよー！」

今ここに神が造り出した聖物と人間の造り出し物が対峙した。